ヒバクと健康 LETTER 通巻 41 2021-2

2021 年 2 月 20 日号

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト
http://hibakutokenkou.net/

311 から 10 年

怒

あの時　国際フォトジャーナリスト・中村梧郎氏は、現地からの迫真のレポートを発信した。

ご本人の了解を得て、本誌に原文のまま再掲する。

▲双葉町にて

Profile 中村梧郎（なかむら・ごろう）

1940 年生まれ。ベトナム戦争中の 1970 年に写真記者として現地を取材。以来、半世紀近く枯葉剤被害の取材と撮影を続けている。元・岐阜大学地域科学部教授。「マスコミ九条の会」呼びかけ人。著書に『戦場の枯葉剤』(岩波書店)、『新版　母は枯葉剤を浴びた』（岩波現代文庫）など

ニューヨークの SHIVA Gallery で私の福島原発関連写真 2 点を含むアート作品展が 2020 年 12 月 30 日から始まっています。今年の 6 月末までです。総合タイトルは「Silence」…right of silence (沈黙の権利)ということでしょうか。BLM 運動の高揚のなかで出てきた企画だと思います。その基盤となるコンセプトは、米憲法修正第 5 条の〝何人も理由なく刑に処せられることがあってはならない“です。私の作品題は”Explosion”. 原発による被災(悲劇と沈黙を強いられている）です。

昨秋届いた求めは「Silence でイメージできるものを送れ、世界中からボランティア参加を募っている」でした。僅か 2 点ですが、3.11 の 10 周年(彼らがそれを知っているかどうかはわかりませんが)に米国でも展示されているのは意義ありと思います。

（中村梧郎氏から田代へのメールより）

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問

有馬理恵 劇団俳優座女優

石塚健 医師

沢田昭二 名古屋大学名誉教授、理論物理、内部被曝研究者

曽根のぶひと 九州工業大学名誉教授

玉田文子 医師

西尾正道 北海道がんセンター名誉院長

本行忠志 大阪大学医学系研究科教授

益川敏英 ノーベル物理学賞受賞、名古屋大学特別教授・素粒子研究機構長、京都大学名誉教授

松崎道幸 北海道旭川北医院院長

矢ケ崎克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト

理事 浅野真理、住田ふじえ

監事 三宅 敏文

◆「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表　田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙４０７－９９７☎0287-76-3601

Ｅメール：masa03to@gmail.com

【再掲】　中村梧郎のフォトエッセー「放射能の降った街」

▲市の街とさせられた浪江町の高濃度汚染地区 原発から 9km　2011 年 4 月 6 日撮影

人影がなかった。

街の中だというのに、車の音もざわめきも聞こえない。あたりは深い静けさに覆われていた。2011 年 4 月 6 日、私は被災して間もない浪江町に入った。3.11 から 3 週間あまり、周辺はまだ高濃度の放射能に満たされていた。富岡街道と呼ばれる国道 114 号を東に進むと常磐線と交差する陸橋がある。橋はかろうじて落ちずにいたが、アスファルト道路には地割れがのびていた。原発から 9km。路面が激しくうねっている。巨大なエネルギーが地中でうごめいた跡であった。

　撮影は、地面すれすれでカメラを構えるしかなかった。地表の凹凸や亀裂はそうしない

▲前方は福島第一原子力発電所 2013年

と写らない。ふつう地上1mあまりで計測される放射線量は、地表近くでは10倍ほども高くなる。だがその日は線量計を持参できなかった。秋葉原でも売り切れで入手できなかったからだ。たとえ針が振り切れるほどの汚染があったとしても逃げ出すわけには行かない。地面の割れ目には、小さな落ち葉やゴミに混ざって、繊維状のものが吹き溜まっていた。ファインダー越しに見る浪江町の商店街は「死の町」にさせられていた。2万1000人の町民は放射能に追われて自力で逃げ、流浪の暮らしを始めていた。倒壊しかけた家のカーテンがひらひらと波打っている。高濃度汚染地区のここに住民が戻るのはほとんど絶望的であろう。あちこちに吹き溜まっている繊維は、12日の1号機の水素爆発で飛散した原発建屋の断熱材であったことを後に知る。放射能塵を含んだまま、死の灰のように広範囲に降ったものだ。地割れの中の微小繊維を私もハァハァ呼吸しながら吸い込んでいる。

▲津波で流された浪江町・棚塩地区。高濃度放射線のために遺体捜索もままならなかった

海岸に向かって進むと津波で流された瓦礫が行く手をふさいでいた。車や畳、材木や冷蔵庫などが見渡す限り散乱している。潰れた乗用車が目に入った。中に着衣の一部が見えた。それは動かぬ人の姿に違いなかった。撮影どころではない。私はその場で手を合わせることしかできなかった。事故から二十数日がたっている。この地区は放射能汚染がひどいからという理由で自衛隊と警察はまだ一度も捜索に入っていない。多くの人が放置されたままだったのである。体を挟まれたまま助けを呼び続け、力尽きた人が居たかもしれない。原発から20キロ圏には数百～千に上る遺体があると推定されていた。

後にテレビに登場した電力企業側の人物が「原発事故や放射能で死んだ人は居ない」と言ってのけたのを聞いたとき、私の胸に怒りがこみ上げた。2012年7月16日に名古屋で行なわれた政府による意見聴取会での中部電力・原子力課長の発言である。人の死とは即死

だけではない。事故に伴ってさまざまに死を余儀なくされた人々がいたのに、直ちに死んではいない、というレトリックを使うことで責任を逃れようとしたのである。

「原発さえなければ」と書き残して、事故から3か月後に自殺した酪農家もでた。福島第1原発の南西5キロにあった双葉病院を見れば、緊急避難はまさに地獄絵であったことがわかる。絶対安静をふくむ340人の患者たちはベッドごと寒空の下に運び出され、5日間に及んだ搬送で絶命した人は19人、さらに3月中に21人が亡くなっている。近くの老健施設の入所者も10人が亡くなった。双葉病院の患者遺族らは「事故がなければ避難も、死亡することもなかった」として、法廷で東電の責任追及を開始している。

今後は、さまざまな心疾患やガンなど、緩慢な死が顕在化していくのが予測される。原発作業員の被曝も悲惨である。厳密とはいえない報告によっても、甲状腺がんのリスクが高まる100ミリＳｖ以上の作業員が178人いて、最高は1万1800ミリＳｖである。ずさんな労働現場からはすでに5人の死者が出ており今後も犠牲が続くはずだ。復興庁は2012年夏、原発事故後の避難所生活での肉体・精神的負担による死は433人、移動中の死は380人と、ストレス死が多かったことを発表している。飯館村や浪江町など避難区域の子供たち3万8000人を福島県が調べた結果、3人から甲状腺がんが見つかり手術が行われている。100万人に1～2人という通常の発生頻度の26倍である。それでも県は「被曝影響は考えにくい」という恣意的な発表をした。原発事故で死んだ人はいないと言う原子力ムラ同様、放射能被害を過小に見せようとする動きには警戒が要る。

「死の町」にしたのは誰なのか

かつて、被災地を訪れた鉢呂経産大臣が「死の町」という表現をしたとしてその地位を追われる事件があった。彼に対する攻撃は別な角度からも行われた。現場から帰っての会

見で、記者らに「放射能をつける」と言ったという不思議な報道である。ぶら下がり会見の場に居合わせなかったフジＴＶが「そのように言った」と最初に報じた。各社はあわてるが誰もそんな発言を録音からは見つけられない。フジの後追いとなった各社は見事にバラバラの想像発言記事を作り上げた。「放射能をつけちゃうぞ（朝日）」「ほら放射能（読売）」「放射能をつけたぞ（毎日）」「放射能をつけてやろうか（日経）」「放射能をうつしてやる（産経）」「放射能を分けてやるよ（FNN）」。鉢呂本人も「そんなこと言った覚えはないが」と言ったまま辞任に追い込まれる。

その結果、経産官僚が示した審議会のメンバーが「原子力ムラに偏りすぎだから脱原発派と同数にすべき」という鉢呂の構想が葬られる。「居住可能地は１ミリＳｖ以下に」と言う彼の考えも棚上げにされてしまう。原子力ムラはメディアを使って不都合なものを抹殺できる力を持つ。2011年にも細川前厚労大臣が「町全体が死の町…」と国会で述べているが彼は標的にはされなかった。チェルノブイリ・ルポでも各紙は「死の町」表現を使ってきた。それが福島事故に関してだけは「死の町」という言葉は使うべきでないという風潮が広がった。住民の気持ちを逆なでするからと。しかし、逆なでしたのは言葉ではなく原発事故そのものなのだ。こんなことでは「死の町にしたのは誰なのか」という視点を見失う。メディアが言葉を規制し、事故の責任をあいまいにしてゆく流れは危険である。記憶を風化させてはならないのだ。

浪江町の瓦礫の中に立ちながら数時間がたった。カメラを首に下げたまま手を後ろに組んでいると指先に何か生暖かいものが触れた。振り向くと大きな白茶色の犬が私の手からとび離れた。誰かに飼われていたペットなのであろう、目だけが野犬化してギラギラしているのが異様であった。よくこれまで健気に生きてきたものと、その瞬間は感動し、しかしその生命の維持を不思議にも思ったものだった。

「高校の教室で暮らす原発被災者」

夕食の時間が近づいていた。

埼玉県加須市の騎西高校の教室。今なおそこで暮らす渡部三重子さん（65）がつぶやくように話しはじめた。

「食事は自炊ですよ。洗面所の流しで材料と食器を洗って、この部屋で卓上コンロで煮ています。電子レンジもね、一応あります」。教室は段ボールなどであいまいに仕切られて何家族かがともに生活している。黒板には日本地図や激励の寄せ書きなどが雑然と貼られている。脇のベッドには93歳になる母親が静かに身を横たえていた。3.11から２年と数ヶ月が過ぎたというのに補償も無く、被災者はいまだに教室での暮らしを余儀なくされているのである。

「原発から3.5km、双葉町の新山に住んでいたんですよ。大津波警報が出たのであわてて北小学校に車で逃げたんですが、そこがもう、はあ満杯で。双葉と浪江の境に“いこいの村”があってそこへ行きました。翌朝、原発から放射能が漏れたと聞き、これはもう帰れんと、114号線を山のほうへ逃げました。母の実家が国見町でしたのでそこに8日間。原発の爆発があったので、また逃げなくてはと、まずは実家からお金を借りました」。

どっちへ逃げなさい、という指示は無くすべてが自主的な決断だった。しかしその頃すでに原発から北西方向に流れたプルームが高濃度の放射性粒子を地上にばら撒いていた。

建屋から吹き飛んだ断熱材の繊維が細かい死の灰となって降り注いでもいた。避難の途中で人々がそれらを吸い込まないはずも無かった。

「埼玉にいる娘から『双葉町は埼玉スーパー・アリーナに移るそうだよ』という情報が入りました。迎えのバスが来る福島の東運動公園まで約30km。10㍑ずつ買いためた貴重なガソリンを使って行きました。11台のうちの最後のバスに乗ることができてホッとしたら、それまでトイレを我慢していた母の様態が急変してしまいました。おしっこはもう出ません。同乗の看護婦さんが診てくれて『これは救急車だ』と。脈も弱くなっていました。蓮田の病院に入院して回復、ようやくアリーナに向かうことができました。ところがアリーナの床は綿埃がすごくて、段ボールを敷いているのに母と二人、咳で苦しみました。騎西高校へ移ったのは３月31日。母がトイレで倒れたのはその４日後でした。病院でレントゲンを撮ると重症の肺炎で、退院まで４ヶ月かかりました」。

搬送中に、19人、さらに21人、老健施設でも10人が…

寝巻き姿の母親は、白髪の頭をベッドからもたげて娘と私のやり取りを聞いている。もう起き上がれるしご飯も食べられるという。基礎体力があったのであろう、とても90過ぎとは思えないほど肌色が良かった。それにしても逃避行は命がけであった。双葉病院の入院患者は災害翌日からの搬送中に19人が死亡、３月中さらに21人、老健施設でも10人が死亡している。福島県ではその後1400人以上が災害関連死と認定されている。「原発で死んだ人はいない」と言った高市早苗議員がなぜ未だに自民党政調会長なのだろうか。

「アリーナからは1400人が移って来ました。それをひと教室25人で割りふりました。でも、借り上げ住宅やホテルに移った人も出て、今ではこの高校に百人あまりです。福島に帰りたいとは思いません。今後原発がどうなるかわからないし。いずれここが閉鎖された

らどうしたら良いか。埼玉に住宅を確保してくれるならこっちに住みたいのです…」。

各地に2000ヵ所もあった避難所はすでに閉鎖され、埼玉県騎西高校の１ヵ所だけが残る。そして、中で暮らす人の８割が「汚染地に帰りたくない、ここ以外に住むところがない」と考えている。平均年齢は68歳である。井戸川克隆・前町長に代わってこの3月に就任した井沢史朗・双葉町長は、６月17日、騎西高校に置いていた役場を一部を残していわき市に移動させた。それとともに騎西の避難所をいずれ閉鎖する方針を明らかにした。福島県内の仮設や借り上げ住宅に戻ってくるよう呼びかけたのである。

国は事故後から、公衆被曝限度を20倍にした

事故後、国は年間被曝限度を従来の1mSv／年から20倍も高く設定した。しかし事故が起きた途端に20mSvに耐えられる人体へと住民が変身したはずはない。つまり政府が「被災者は汚染地に戻れ」と言っているのである。井戸川前町長がジュネーブの国連本部で日本政府の対応を「許されない殺人行為」として告発したのは当然のことであった。

20mSvというのはチェルノブイリであれば強制避難あるいは移住の義務ゾーンとして国が住民を疎開させる地域である。1~5mSvでも移住の権利ゾーンと指定されている。住民に疎開の権利を与え、土地と家屋、農地や職業の保障を国が行うのである。しかし日本では子供たちの疎開さえ行なおうとしない。子供・被災者支援法が成立して1年も経ったのにそれを実施しようという気配もまったく無い。支援法の基本方針をとりまとめるはずだった復興庁の水野靖久参事官はツイッターで「白黒つけずにあいまいなままにしておく」のが“解決策”のひとつなのだと豪語するありさまなのである。６月に公表された福島県による子供の甲状腺検査の結果は、甲状腺がん・悪性または疑いが27人（確定12人）となった。がんが多発し始めている。

1mSv以下に下がるまで帰還させるな、と国連人権理事会

国連人権理事会は5月末、日本政府に対して「１mSvを下回るまでは帰還を強いるべきではない」との勧告を行った。まさに「人が健康に生きる権利」を日本政府が侵害している事態を糾弾しているのである。

国や電力企業は、たとえば先年完成した岐阜県の徳山ダムのように住民を立ち退かせて工事を強行しようとした場合、どんな古い家に住んでいたとしても、移住先で住宅を新築できる潤沢な金額と補償金を支払う。一戸あたりにすれば億を超える金をばら撒いて移動させるのである。ところが原発事故で追い立てた住民に対して東電は「土地も安いところだし、老朽家屋だから」と低い評価額を出す。たとえ１千万円前後が提示されたとしてもそんな額ではどこかに家と土地を買うことはできない。住居も地域の人間関係も伝統もすべてを奪ったというのに、東電には事故を償うとか損害賠償をするといった姿勢は微塵もない。それが嫌なら打ち切るぞと言わんばかり、犯罪者のほうが居丈高なのである。

福島県の内外でいまだに避難生活を送る１５万人の「流浪の民」。“原発事故は収束した”という政府発表を信ずる人はいない。避難生活が長引く中では家族の崩壊も深刻な問題と化している。PTSDの患者数は63%を超えたという。

政府は原発の再稼動を公言した。

その裏で残酷な棄民策がひたひたと進んでいる。

20130630　中村梧郎

◆以下は、私（田代）が 2013 年 1 月ある冊子に書いたものである。
当時の放射線線量など様子がわかるので再録する

「飯舘村行」

3・11 から 2 年が過ぎようとしている。
「市民と科学者の内部被曝問題研究会」の 2012 年 1 月 27 日結成記者会見から、1 年が過ぎた。
新聞の仕事を無事退職して、妻と少しのんびりしようと栃木県那須町に居を構えた途端の“レベル 7”であった。当時、那須町議会で取材中であったが、震度 6 強のすさまじい揺れに、一瞬ではあったが人生への覚悟が頭をかすめた事を思い出す。

2013 年 1 月 8 日、「原点を忘れないで」という妻の声に背中を押されて、私は福島県郡山駅に降り立った。
駅前のモニタリングポストは、0.23μSv/h（以下/h）を示す。皮肉というべきか、法律で定める公衆被曝限度・年 1mSv の環境省の言う 1 時間の被曝限度ぴったしだった。
そこから、私の「飯舘村行」は始まった。会員で南相馬に住む吉田邦博氏が同行してくれた。走り出して間もなく、私は自覚の甘さを思い知ることになる。

二本松市から安達町、川俣町と県道を東進するにつれ、車内の線量計は 0.6～0.8μSv へ跳ね上がり、飯舘村に着くころには 1μSv を超えていた。県道沿いの村の老人憩いの家「やすらぎ荘」に寄ってみる。なんと地上で 2.3μSv。背筋に悪寒が走る。役場に行った。さすがに除染済み。0.62μSv を示すモニタリングポスト横、町民歌碑では 0.9μSv 、付近の草地は 1.2μSv であった。役場前県道出口で車内で 2.1～2.2μSv。そこから、いまでも 10μSv 近くあるという村の「蕨(わらび)平」をめざした。場所は村の山中。

先を急ぐ。
通りがかりの「仲の内森林管理署」4.1μSv 。3.1μSv の小宮簡易郵便局前を回ると山道だ。だんだん線量が上昇する。「蕨平」まであと 5 ㌔近く、4μSv。あと 4 ㌔、6.4μSv。3 ㌔のところで 5.3μSv とやや下がる。「ほっ」とする自分が怖い。無人の農家から痩せた猫が 2 匹、ふらふらと出てくる。無言。吉田さんの「猫は死なないのかなあ」というつぶやきに、ぎょっとする。

「蕨平」公民館に着く。標高 500 ㍍くらい。モニタリングポストがあった。4.03μSv の表示。しかし前庭では 9.02μSv。垣根近くの黒い大袋付近は 9μSv 以上。ここは立ち入り規制区域ではない。放置状態だ。浪江町との境界近く、原発から 35 ㌔程だという。激しい感情が私を襲った。

山道途中の田畑は、ほとんど土を掘り、削った田畑だった。そこに晴天の夕日が差し込んでいた。斜面を照らしていた。日本農村の原風景が、そこにはあったのだ。目を凝らすと、主のいない家、荒れ放題の作業小屋、ときおり放置された軽トラックがあるのみであった。
帰りは福島へ。114 号道路のトンネルを抜けると福島市の夜景が飛び込んできた。こうこうと輝くさまは、他の都市と変わらぬように見える。すぐ、わたり病院前を通過。ここで、車内 0.4μSv を示す。
こうして私の「飯舘村行」は終わった。

（田代真人　2013・1・9　記）